



パリ1750

子供集団誘拐事件の謎

△・ファルバジオ+ト・ルヴァル 著

三好信子 訳

新曜社刊 1854円
四六判 168頁

四百三十九

。な樟あ

も「とも、このふたつがうちに機能したことは、一度もない。人間は秩序・安寧を求める当の手で、秩序・安寧を好み壊すよう行動する存在であるからだ。」

浮浪者狩りへ
噂の根は深いものだ。十七世紀末以来、パリは浮浪者の増加に悩んでいた。麦の不作によってともなう飢饉をはじめ、地方であぶれた者が、パリをめざして流れ込んでくる。一七年の段階で、乞食の数は

は、その三十年前の記憶に根ざしているのである。

△出来高払いの逮捕▽
事実は、遷卒たちの証言によっても明白だ。十六日の騒ぎのあと、騒ぎは血なまぐさい様相をおびてくる。五月一十三日、それは、はつきり反乱としての体裁をとる。

卷之三

秩序のための 人狩り＝犯罪

△出来高払いの逮捕△

V

秩序のための 人狩り＝犯罪

きつかけだった。叫びは、噂に毒された者の、過剰反応ともみえる。しかし、選卒たちは、たしかに、子どもを誘拐しようとした。

にも作用するのだ
機能を維持する
する人口を抑制す

た選手たちが、地区警視の家に逃げこむ騒ぎが起こっている。

一七五〇年五月、パリはその幻滅の危機に瀕している。パリの評判は、悪くないものらしいと形を成さないし、集める魅力をもたないかぎり、都市として機能しない。一方で、流入する人口の増殖は、都市の機能を麻痺させるよう

馬車は、徵用された辻馬車だった。その後も、辻馬車を使つた拉致はつづき、十六日には、拉致に失敗した馬車が住民たちに追われ、乗つてい

警告で群衆が殺到し、少女は救出される。遅卒は逃げた。

ユートピアとして人間を支配する都市幻想の破綻

にも作用するのだ。

馬車に乗った遷卒の一隊を
みとがめ、「あいつら、私たちの子どもをさらおうとして
いた遷卒たちが、地区警視の家に逃げこむ騒ぎが起こっている。

ミスティック
ロコモコ

10億の古本の山から数百ドルの値打ちの本を探しだすプロを『古本掘り出し屋』、といいうらしい。『死の蔵書』(ジョン・ダニング ハヤカワ文庫)は掘り出し屋殺しの捜査担当刑事が、勇み足が原因で辞職。趣味を生かして古本屋になるが、殺人事件の真相追及にも執念を燃やす……作者自身が一度小説執筆に見切りをつけた後、小売店や予約注文客だけを相手に古本で食ってきたとか。稀覯本の有名なエピソードや、古本の価値を決めるポイントや裏話、取引の内幕などウンチクが山もり。サービス精神と手堅い構成で大人向けのミステリー、好編である。

カリブ島に住む富裕な夫妻が娘の世話係に旅人の美貌の女性ダイアナを雇った頃から周辺に不可解な殺人事件が続く……トム・サヴァージのデビュー作『崖の家』(ハヤカワ文庫)はサイコの味つけをしたギリシャ悲劇の裏番組。新人の作品に有名作家の賛辞をつける戦略は珍しくないが、今回はR・B・パークー、L・ブロック、J・ケラーマン、L・ヒル、D・ウェストレイクなど重鎮が褒めまくる。ふと、スタンダールの小説をバルザックがカネをもらって褒めたという逸話を思いだしたが、コノタビはいかがなものだろうか。面白くないとはいわないが、思わせぶりで、新人らしからぬさもしさが後味を悪くする。作者はミステリー専門書店の社員さんだ。『私が愛したリボルバー』(ジャネット・イヴァノヴィッチ 扶桑社ミステリー)の元OLのステファニー・プラムは、食うに困って借りた保釈金を返さずにフケる横着者を捕らえるバウンティ・ハンター(賞金稼ぎ)に転身。向こう気は強いが、ピストルは撃てない、特技なし、バツイチの30女。彼女の最初のターゲットは幼なじみの元警官で、この男にはお医者さんごっこや初体験をしてやられたというアンビバレンツがある。捜査を始めると、タイソンみたいなチャンプに襲われたり、ドジの踏みっばなしだが、お色気に捨てがたいものがあるという役柄、昔の桃井かおりにひついたり。業界の面々や家族、街娼など登場人物がいはずれも下町ふう人間臭さで精彩を放つ。下世話な落語タッチのハードボイルドだが、中々の筆力で飽かせない。(L)

寧という大義の陰に行なわれた犯罪は、涼しい顔をきめこんでいるのだ。

証言によれば、一名逮捕するごとに、隊長には十二フランが支払われた。隊長の取り分けは、十五ソルだった。わずかだが、下級官吏には魅力的な報酬だ。かれらは、だから子どもを狩つた。

それまでの都市は、国王の支配下にあるといつても、細部は勝手に動いていた。警察機関も、地区ごとに置かれた警視が支えており、警視は、地区的親近性に根ざし、裁量していく。ベリエは、これを無視。直轄の警部職を動員して、治安にあたらせる。

警部職が新設されたのは、一七〇八年である。地区的親近性に根ざさないこの秩序と、安寧の装置は、当然ながら、ずっと不評だった。それは、

かくて、子どもの誘拐は日常茶飯の出来事となる。遅卒が徵発する辻馬車は、狩られた子どもたちで、つねに満杯の状態になる。これは単なる誘拐ではない。誘拐が犯罪だとすれば、お上の墨書きの犯罪である。

まれているのである。
せんたい 浮浪者でも
ない者が、しかも子どもが、
なぜとらわれねばならないの
か？ これは秩序・安寧に名
を借りた人狩り＝犯罪という
以上の、何ものでもないでは
ないか？ 弾圧、という言葉が、そこ
で輪郭をとることになる。

へあいまいな選択▽
弾圧、というよりほかなか
った。子ども狩りは無差別で
あり、当局に無差別という意
思をもつてやる。(二三)

都市の本性

小林よし
7月上旬
A5判／全
定価1,000

のり著
司発売予定
1-900ページ
100円(税込)
「SAP」
「ナ-言」



「薬害工イズ問題」オウ
ゴーまんかましてよか

「ム」に、
ですか？

